

内外交差点

インバウンドの移動を担う 「タクシー+観光」の可能性③

森田 玲子氏（姫路タクシー社長） 第3/12回

さかのぼれば万葉人もその美しさを讃えて歌を詠み、源平の合戦や村上水軍の激しい戦いの舞台ともなった海は令和の今も淡い瑠璃色の光をたたえている。前号で記した倉敷の視察後、翌日は瀬戸内海に浮かぶ島、直島を目指した。

今どれくらいの方がこの「直島」のことをご存じだろうか。5年程前からちらほら直島関連の注文が入り始めた。コロナで一旦途絶えたが、去年から復活している。直島～京都・大阪ラインが確かにインバウンドを呼び込んでいる。瀬戸内海に浮かぶ美しい島というだけではない、ここは3年に一度開催される「瀬戸内芸術祭」のメイン会場になっており、次回は万博と同じ来年2025年に開催される。

この島で象徴的に存在するのが草間彌生の作品であろう。キラキラとした海辺に黄色のかぼちゃを見た時、前衛芸術に無知な私でも心ときめき、思わず駆け寄って何枚も写真を撮った。万人を惹きつける魅力的なオブジェである。直島の感想はここでは書ききれないので置いておき、視察として学んだことを記したい。

まず岡山県側の宇野港からバスと共に乗船する。ここはフェリー予約ができないので、皆随分早い時間から乗り場に車を連ねている。われわれの後ろに控える大阪ナンバーの大型バスはネームプレートにアルファベットが見える、海外の観光客であろう。多くは下車して思い思いに時間を過ごしている。

私はいつも「インタビュー調査」と称して目の合った外国人に「Hi」と話しかけ、いくつかの質問をすることを楽しみの一つにしている。姫路市内でも、また、このように観光地を訪れた時もその機会が楽しい。基本的には日本での旅程や、なぜその観光地を選んだのかを尋ねるのであるが、会話は単なる質疑応答に止まらず意外な情報を得るもので、これが「インタビュー調査」をやめられない理由である。

今回も60～70歳とおぼしきある夫妻に声をかけた。彼らの団体はオーストラリアのさまざまな地域から集まり、シドニーから東京に入国していた。こ

の時に最も興味深いと思ったのは、彼らがシドニーから東京への10時間に及ぶフライトのみを「移動」と捉えていたことだ。彼らの日本国内での移動は新幹線とバスであったが、全く気にしていないと言うよりむしろ移動とすら思っていないのである。考えれば彼らの国土は日本の20倍あり、当然移動といえば飛行機となる。ちょうど同時期に大学生の息子がオーストラリアへ旅行していたので彼の旅程を話すと「それぞれ全て飛行機で3時間かかるわね」と言う。国内移動が3時間か…関空から3時間飛ばせば…沖縄を通り越して台湾に到達してしまうのではないか。大陸から来る人は、距離と時間の感覚が全く違うということを感じた。そしてタクシー事業者の私は、インバウンドの移動にもっとタクシーを活用できる可能性を提案すべきだと思った。姫路を起点に1時間半ほど（走行約100キロ）の移動を考えたら、東は京都、北は城崎温泉、南は淡路島から徳島、西は倉敷や香川の金比羅宮…と、これほどバラエティに富んだ観光地までお連れすることができる。

近頃ではオーバーツーリズムの問題が取り沙汰されているが、私も京都に降り立つと確かにそれを実感する。駅も新幹線も市バスの車中も彼らの大きなスーツケースで占有されているのは皆さんもご存知だろう。訪問先の分散も必要だが、今われわれがすぐにはできることの一つは「移動手段の分散」をタクシーが担えると宣言することではないか。弊社で実際に提案してみても新幹線からタクシーに変更されたお客様は少なくない。ドア・ツー・ドアの魅力もあるが、ここは円安の影響も大きい。

先ほど言及した「インタビュー調査」であるが、私は乗務員にもその面白さを伝えている。英語が話せる乗務員は一人しか在籍しないが、翻訳アプリも大活躍していてコミュニケーションは気軽にできる。また、多くの富裕層は日本語ガイドを帯同している。あらゆる手立てでほんの半日ほど、外国人とご縁を持ったドライバーは大袈裟ではなく「国際交流」を経験する。いや「国際親善」と言ってもよからう。タクシーだからこそできるこの貴重な経験は彼らの文化的な意識を高め、普段のタクシー乗務への姿勢にも良い影響を及ぼす結果になっている。

